

## 小論文 5 つのキーワード

キーワード③④



### 《さまざまな差別や偏見》

- (1)  **差別** 人種や民族的背景に基づく差別。(例) アパルトヘイト。
- (2)  **差別** 性別に基づく差別。(例) 男女の賃金格差、性的役割に基づく期待。
- (3)  **差別** 信仰や宗教的な慣習に対する差別。(例) 反ユダヤ主義、イスラム恐怖症。
- (4)  **差別** 年齢に基づく差別。(例) 求人における高齢者の不採用、若者への偏見。
- (5)  **の差別** 性的指向に基づく差別。(例) 同性愛嫌悪。
- (6)  **への差別** ジェンダーアイデンティティに関する差別。(例) 性転換者への偏見。
- (7)  **差別** 身体的、精神的障害を持つ人々に対する差別。
- (8)  **差別** 社会的・経済的地位や階級に基づく差別。(例) カースト制度。
- (9)  **差別** 特定の国や地域の出身者に対する偏見や差別。(例) 部落差別(同和問題)。
- (10)  **差別** 話す言語やアクセントに基づく差別。(例) 方言や訛りを嘲る。
- (11)  **差別** 体型や体重、外見などの特徴に基づく差別。(例) 方言や訛りを嘲る。
- (12)  **差別** 出身高校や大学に基づく差別。(例) 学歴フィルター。

### 《差別が生じる理由》

- (1)   
他者や異文化に対する知識不足が差別的な態度や行動の原因となる。
- (2)   
未知や異質なもののへの恐れや不安に対し、自身の集団や価値観を守るために排除しようとする。
- (3)   
差別的な態度や行動は、親や教師、友人、メディアなどの影響を受けて形成されることが多い。
- (4)   
差別は権力を保持し、経済的利益を得る手段として利用されることがある。
- (5)   
他のグループとの差別を通じて、自分たちのグループのアイデンティティや連帯感を強化する。
- (6)   
差別や偏見は自身の欠点や不安を他者に投影することで自己の価値を保つ心理的機能がある。
- (7)   
ある社会や文化が持つ伝統や価値観が特定のグループに対する差別を正当化することがある。

## 《差別の歴史的事例》

### (1) アメリカの

16世紀後半から19世紀半ばまで、主にアフリカから連れてこられた黒人が南部の農園で労働力として使われた。彼らは所有権の対象とされ、基本的な人権を奪われた生活を強いられた。奴隷制度は1865年に廃止されたが、黒人に対する差別や人権侵害は現在でも続いている。

### (2) ドイツの

第二次世界大戦中にナチス・ドイツによって行われた大量虐殺政策。主にユダヤ人を対象とし約600万人が命を失った。ナチスは強制収容所や絶滅収容所でシステムティックにユダヤ人を殺害。この大量虐殺は同性愛者、ロマ、スラブ民族、障害者、政治犯など他のグループにも及んだ。

### (3) 南アフリカの

1948～1994年に実施された、南アフリカの人種隔離政策。白人少数派が政権を握り、非白人多数派の市民権を制限して、劣悪な居住区に強制移住させた。教育、医療、公共の場など、あらゆる面での差別が法的に認められていた。国際的な非難を受け、1990年代初頭にアパルトヘイトは終焉した。

### (4) インドの

インドの社会的階級制度。人は生まれながらカーストによって職業や結婚相手などが決まってしまう。上位から、ブラーフマナ（僧侶・学者）、クシャトリヤ（戦士・王族）、ヴァイシャ（商人・農民）、シュードラ（労働者）と続き、その下に「無カースト」がある。公式には1950年に憲法で差別が禁止されたが、実際には偏見や差別が今も存在する。

## 《日本での差別の事例》

### (1)

日本の歴史的背景に基づく社会的差別で、主に「非人」「穢多」等とされた部落出身者を対象としている。彼らは「汚れた職業」に従事する者として差別され、経済的、社会的な不利益を被った。その偏見は現代も根強く残っている。

### (2) への差別

北海道を中心に居住していた先住民族で、歴史的に経済的・文化的な同化政策が行われ差別・抑圧を受けてきた。土地や文化が奪われ、言語や風習が失われる過程で、彼らのアイデンティティは脅かされた。現代でも彼らに対する偏見や誤解が存在する。

### (3) への差別

在日外国人とは、日本で生活する外国籍の人々を指し、特に歴史的背景を持つ在日コリアンや在日中国人などが対象となることが多い。彼らは経済、社会、文化的な活動で差別や偏見を受けることがあり、同化の圧力やアイデンティティの問題に直面している。

## 《他国での差別の事例》

### (1) への差別（オーストラリア）

オーストラリアの先住民であるアボリジニは、ヨーロッパ人の入植以後、土地の奪取、子どもの強制的な取り上げ（いわゆる「盗まれた世代」）、文化的弾圧など多くの差別や苦難を経験した。

### (2) の迫害（ミャンマー）

ミャンマー西部ラカイン州のムスリム少数民族であるロヒンギャは、国民としての権利を認められず、迫害や大量虐殺の対象となっている。

### (3) への差別

ヨーロッパからの移民による土地の奪取、文化の破壊、先住民の強制移住などが行われた。現代でも経済的な格差や健康問題、文化的な課題が持続している。

### (4) への差別・弾圧

中国・新疆ウイグル自治区のウイグル族などの少数民族への弾圧や文化的差別。中国政府による文化・宗教の抑圧、再教育キャンプへの収容など、人権侵害が国際的に問題となっている。

### (5) への差別・弾圧

ヨーロッパ起源の遊牧民族であるロマは、数世紀に渡り様々な国で差別や迫害を受けてきた。「ジプシー」として誤解や偏見から教育、雇用、住居などにおいて差別的扱いを受けている。

### (White Australia Policy)

オーストラリアの移民政策として 19 世紀末から 20 世紀中盤にかけて存在した、非ヨーロッパ系移民の制限や排除を意図した政策の総称。この政策の背後には、オーストラリアの国民的・文化的アイデンティティを「白人」や「ヨーロッパ系」として保護・維持したいという思想があった。結果として、アジアや太平洋諸島からの移民が特に制限された。

白豪主義は、1901 年の移民制限法（Immigration Restriction Act）の制定を始めとして、公式な政策として形成された。この法律は、非ヨーロッパ系移民の入国を事実上制限するもので、特定の言語テストを用いて入国を制限した。

1970 年代に入ると、多文化主義の台頭や国際的な非難の中で、白豪主義政策は段階的に撤廃され、オーストラリアは多文化国家としての方向性を確立しました。

## 《多様性がもたらすメリット》

多様性はグローバルな社会において絶えず強調されるキーワードの一つである。その背景には、国境を越えた情報やモノの流れ、異文化間の接触の増大、そしてさまざまなバックグラウンドを持つ人々が共に生活する現状がある。多様性が持つポテンシャルを理解する



ことは、新しい価値観や視点を受け入れ、それを活用する上で極めて重要だ。実際に多様性を受け入れ、それを活かすことで企業やコミュニティは革新的なアイデアを生み出し、より広い顧客層へのアプローチが可能となるなど、多岐にわたるメリットを享受できる。

### ①

異なるバックグラウンドや経験を持つ人々が協力することで、新しい視点やアイデアが生まれ、革新的な解決策が生まれる可能性が広がる。

### ②

多様な経験や知識を持つメンバーが参加することで、グループは問題の多角的な分析や異なるアプローチでの解決策を探る能力が高まる。

### ③

多様性を受け入れる組織は、さまざまな顧客や市場のニーズに対応する能力が高まる。

### ④

多様性と包摂性を重視する組織は、優れた才能を引き付け、異なる背景を持つ人々のつながりを強固にし、組織へのロイヤルティを高めることができる。

### ⑤

多様性を尊重し、異なる文化や価値観を学ぶことで、組織はより包摂的で開かれた文化を築くことができ、結果的に組織の長期的な成熟と成長に寄与する。

### ⑥

さまざまな視点や意見を持った人々が集まることで、情報の偏りを防ぎ、よりバランスの取れた意思決定が可能となる。

### 《多様性がもたらすデメリット》

①

言語や文化の違いは、意思疎通において誤解や摩擦が生じさせ情報伝達の障害となりやすい。

②

異なる価値観や方法論の存在が、共通の目的や方針に向かって一致して行動する際の障害となる。

③

価値観や意見の対立が発生し、組織内の紛争やトラブルが生じるリスクが高まる。

④

多様性が強調されすぎると組織の一体感や連帯感が損なわれる可能性がある。

⑤

不十分な知識や理解が原因となり、異なる文化や背景を持つ人々に対する誤解や偏見が増加する。

⑥

多様性の推進や維持のために教育やトレーニング、専門家の助言など、時間やコストがかかる。

(melting pot)

かつて、アメリカでは多くの民族から成り立つ様子をと例えた。これは異なる文化や民族が1つの社会に溶け込み、共通の文化やアイデンティティを形成する考え方を指す。このモデルでは、個々の特徴や背景が時間とともに均一化することが期待される。しかし、後にこの考え方は批判されるようになり、と表現されるようになった。これは異なる文化や民族がその特色を保ちつつ共存する考え方を示す。各成分が独自の特性を保持しながら、全体として1つの社会を形成する。このモデルでは、多様性を尊重し、異なる文化やアイデンティティが共存することが重視される。なお、同様の表現にがあり、この言葉はオーストラリアでもよく使われている。

## 《オーストラリアの多文化政策》

オーストラリアは、その地理的・歴史的背景から多様な文化や民族が共存する国として知られている。この国独自の多文化的環境は、移民の受け入れや先住民との関わり合いの中で築かれてきた。1970年代から、オーストラリア政府はこれらの多様性を積極的に受け入れる



方針を打ち出し、多文化政策を推進してきた。この政策は、異なる文化的背景を持つ人々の権利の保護はもちろん、社会全体の調和や共生を促進することを目的としている。現在では、国内での文化や言語の多様性が認識され、国民に尊重されるようになった。

### ① Racial Discrimination Act ( )

1975年に制定され、人種に基づく差別を禁止している。公共の場、雇用、住居、広告、教育などの領域での差別行為を違法とし、人々の平等な権利を保障している。また、公衆に対して憎悪や蔑視をあおるような行為や発言も禁止している。

②

オーストラリアの多文化教育は、多様な背景を持つ生徒たちの文化的アイデンティティを尊重し、異文化間の相互理解を促進することを目的としている。学校カリキュラムには、先住民文化や移民の歴史、多様な文化の認識が組み込まれており、多様性の価値を教育するためのプログラムとなっている。また、多言語教育が重視され、さまざまな言語の学習の機会が提供されている。

### ③ SBS (Special Broadcasting Service : )

1970年代初頭に設立された多文化・多言語の公共放送局。移民の多様なニーズに応え、異なる背景や言語を持つコミュニティを結びつける役割を果たしている。ラジオやテレビ、オンデマンドサービスを通じてコンテンツを提供。オーストラリアの多文化的アイデンティティを反映し、異文化間の相互理解を促進している。

④

かつては英語オンリーの同化政策を推進していたオーストラリアだが、その失敗と人権意識の高まりから多文化主義政策に転換。1987年に言語政策「National Policy on Languages」を策定し、英語教育や多言語サービス、多言語教育政策が充実した。特にすべての子どもが英語以外の言語を学ぶ目標が掲げられ、家庭での母語や継承語を「コミュニティ言語」として重視。これらの言語能力を社会の「言語資源」と位置づけ、豊かな多文化社会の形成を目指している。